

わたしたちを祭司として
くださった方に栄光

ヨハネ黙示録 1 : 5 - 6



司祭 ヨハネ 井田 泉

2021年11月21日

降臨節前主日

聖光教会にて

今日の使徒書、ヨハネの黙示録第1章の言葉です。

「わたしたちを愛し、御自分の血によって罪から解放してくださった方に、わたしたちを王とし、御自身の父である神に仕える祭司としてくださった方に、栄光と力が世々限りなくありますように、アーメン。」1:5-6

その方とは、イエス・キリストのことです。この方はどういう方か。今の言葉から二つだけに絞って確かめてみます。

この方、イエスは「わたしたちを愛し」ていてくださる方です。これまでもそうであったし、今も、そして将来も変わらず、わたしたちを愛し続けてくださる方です。

もう一つ。この方、イエスは「わたしたちを神に仕える祭司としてくださった方」です。祭司。神とこの世界の人々の間に立って祈る存在、仲立ちをする存在です。教会は、わたしたちは、神さまからこの使命をいただいた。この世界と神さまとの間に立って祈る使命、祭司的使命です。

今日は個人的なお話をするをお許してください。

明日の11月22日は、わたしの司祭接手の記念日です。今からちょうど42年前、29歳のとき、わたしは主教座聖堂聖アグネス教会で司祭接手を受けました。

司祭の働きはさまざまありますが、その中心は聖餐式を司式することです。それで今日は、聖餐式についてのわたしの思い

出の中から、三つをお話ししたく思います。

42年前、司祭に按手されて、初めて自分で聖餐式を司式するようになりました。下鴨基督教会でした。司祭になりたての頃はぎこちなくて、司式するのにひどく緊張しました。けれども1回1回が非常に特別なものでした。

自分で司式しながら、神さまの臨在をほんとうに感じるのです。創世記にヤコブの物語があります。ヤコブは兄のエサウから長子の権利をだまし取り、それで兄から憎まれて命の危険を感じる事態となりました。母リベカの勧めに強られるようにして、伯父ラバンの所に身を寄せることになりました。行く途中で日が暮れて、石を枕に野宿をします。初めて経験する恐ろしい孤独と不安。

そのときヤコブは夢を見ました。天にまで達する階段があって、天使がそれを上り下りしています。ヤコブは神の声を初めて聞きました。

「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したこと果たすまで決して見捨てない。」

創世記 28 : 15

目を覚ましてヤコブは言います。

「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなか

った。」創世記 28 : 16

これが、わたしが司祭となった頃の経験でした。聖餐式の中に主がおられる。ここから力を与えられて、新しい1週間を働くことができる。毎週毎週そのように感じていました。これが最初の思い出です。

第二の思い出は、神学校（聖公会神学院）の教師をしていたときです。今から30年ほど前、1992年だったかと思います。そのころPKO法案というのが国会に提出されていました。「国連平和維持活動」Peace-Keeping Operation を略してPKOと言いました。PKOによって自衛隊の海外派遣を認めることになる。わたしたちはそれに反対していました。聖公会神学院の学生会が主催して、PKO法案に反対する一日行動をすることになりました。霞ヶ関周辺で祈ったり呼びかけたり聖歌を歌ったりしたあと、締めくくりに聖餐式をしたいというのです。それでわたしが頼まれて野外で聖餐式をしました。

場所は日比谷公園。時間は夜の11時頃。神学生を中心に25人くらいだったかと思います。お坊さんも二、三人加わっておられました。夜中の日比谷公園で小さなテーブルを広げてその上で何かをしようとしている怪しいグループです。警察が「何をするのか」と見つめています。「わたしたちはお祈りをする」という強い意識が起こりました。

祈祷書のとおりに聖餐式をしました。聖書日課を三つ読んで、わたしが説教もして、平和のために祈りました。軍事力によらない平和、戦争と暴力ではなく平和。軍隊を海外に送らない平和。神さまが願われる平和の実現を切に願って祈りました。

聖職はわたしひとりでしたので、わたしが聖餐を配りました。(受けるほうは「陪餐」と言いますが、与えるほう、渡すほうは「分餐」と言います。)

その分餐のとき、わたしは、イエスさまがほんとうに平和を願っておられて、その平和の志を、平和のための情熱をひとりひとりに託される、ということを経験しました。平和はイエスさまの悲願です。パンとともに、ぶどう酒とともに、イエスが平和への志を、情熱を、ひとりひとりがしっかりと受け取るようにと渡されるのです。「わたしの願いをあなたに託する」。

聖餐はイエスの命と志を受けるものと知りました。わたしにとって大きな経験でした。それですから、けっして聖餐を事務的に渡すことはできないのです。

思い出の第三は、聖餐式についての悩みです。実は、つらいと感じることがありました。それは先ほど言いました分餐がしんどい時が続いたのです。パンはまだいいのですが、ぶどう酒はこぼしてはいけないと、とても気を使ってひどく疲れるのです。そういうことが続くうちに、自分が何か間違っているの

はないか、と思うようになりました。

イエスさまは 5000 人に、実際はおそらく 1 万人以上の人々にパンを分け与えられました。パンを祝福して祈って、それを弟子たちに渡し、弟子たちは集まった皆に配りました（マルコ 6:35-44）。そのとき弟子たちはしんどかったか。そんなことはない、と思いました。祈られたイエスさまも、配った弟子たちも、受けた人々も、皆がうれしかった。イエスさまの祝福を受けることはうれしいことであり、配るのも受けるのも分かち合うのも喜びでした。それを経験するのが聖餐（陪餐・分餐）だと気づきました。聖餐をみんなに受けてもらうのは、イエスさまの喜びを運ぶ役割。そのように理解した時から、それまでの分餐のしんどさが消えました。ひとりひとりに祝福を運ぶ、ありがたい仕事になったのです。

わたしを司祭にしてくださった方に栄光！

聖餐式の思い出の中から三つのことをお話ししました。

聖餐式の中に神さまがほんとうにおられる——ヤコブの経験。聖餐を通してわたしたちはひとりひとりがイエスさまの願い、志、情熱を受ける——日比谷公園での経験。そして分餐のしんどさから解放された——イエスさまの祝福と喜びと命を運ぶという発見。

わたしが経験したのは個人的なことですが、内容は皆さんと

一緒に共有したい事柄です。

今日の聖書の言葉に戻ります。

「わたしたちを愛し、わたしたちを神に仕える祭司としてくださった方に、栄光と力が世々限りなくありますように、アーメン」

わたしたちを愛していてくださる方に、より深く触れることができるとように。世と人々のために祈る祭司とされたわたしたちが、祝福と喜びを感じてその使命を果たすことができますように。

祈ります。

主なる神さま、この願いをお聞きください。聖餐を通して主の臨在を経験することができますように。わたしたちがこの世界の痛みを受けとめてそれをあなたに届ける祭司の務めを行うことができますように。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン